

した人々が、自身の否定的感情と漠然とした不満や不安の幾分かを互いに排出させることができる、新たな「記憶」を共有する場所となる。

デカセギの教会は、グローバル化された新自由主義経済の産業構造という「悪魔のひき臼」に投げ込まれた越境者が、ホームランド／ホスト社会、過去／現在、現在／未来という連続と非連続の衝突の中で重層的に感じ取ることになる、ノスタルジィが積極的に作用するところに創造される場所であるともいえるだろう。

パネルの主旨とまとめ

藤野 陽平

本パネルでは移民と宗教に関する問題において、移民集団がもつホームランドへのノスタルジックな感情の諸相を提示した。移民にとってホームランドが特別な意味を持ち、宗教が移民たちの抱くホームランドへのノスタルジアを充足させるという事態は、ごく一般的にみられるが、実際のホームランドへの意味づけのされ方は、それぞれの社会のもつ文脈や各宗教の性格によって多種多様である。そこで本パネルでは、こうした場におけるホームランドの意味づけをエスノグラフィックに描き出すことで、その様態を明らかにすることをめざした。こうした研究を通じて、グローバル化が進む現代社会において、移民をめぐる宗教的状况に肉薄することができる。

第一の高橋典史報告では〈ホームランド〉と〈ノスタルジィ〉を鍵概念として、移民と宗教の特徴を検討した。前半部で

は理論的な整理を行い、パネル全体の要点を説明した。後半部ではハワイの事例から、現地の日系仏教関係者たちの〈ホームランド〉への〈ノスタルジア〉に関わる言説分析から、移民の宗教が供給する集合的なアイデンティティの変遷の一例を、「世代」の問題に着目しつつ示した。第二の藤野陽平報告では台湾においてキリスト教系団体が日本人妻に対して行っているケアについて報告した。戦前戦後の混乱から、本人の意思に関わらず台湾で暮らすこととなった日本人女性をとりまく環境を確認した上で、彼女たちにとって故郷である「日本」とは何であり、それにキリスト教がどのように影響しているのかについて考察した。

第三の川崎のぞみ報告では在日ムスリムに典型的な、パキスタン人の父と日本人の母を持つ女性のライフストーリーから、ハーフである第二世代の信仰の形成過程について報告した。母国のジェンダー規範を求める父親と日本の学校の均質性のいずれにもなじめない彼女が、イスラームの信仰を内面化することで両者を受容可能にしていることを示した。最後の山田政信報告ではブラジルやペルーからのデカセギが国内で設立したプロテスタント教会について検討した。そうした教会はリーマンショックの影響を受けながらも現在もお東海地方を中心に活発な運動を続けている。一方でブラジルに帰国した信者の中には日本にあるエスニック教会との関係を維持しながら新たに教会を開いたり、かつて所属していた教会で活動が続けようとしたりする人がいる。しかし、複数の故国を持つことになった越境者としての彼らが想像・創造する教会という場は、ホスト社会

およびホームランドという二つの空間においていずれも逸脱的である場合がある。同報告では、そのような二重の逸脱ともいえる状況にある彼らのノスタルジーの重層性について、教会とホームランドおよびホスト社会との関係性から論じた。

これらの報告ののち三木英氏にコメントいただいた。近年になつて着手され始めた移民と宗教というテーマに対して、共通の論点を提示した上での議論は有効であり、移民研究においてホームランドとノスタルジアが重要であることは十分に伝わったものの、それが宗教とどのように関連しているのかが見えにくかったことが指摘された。これに対し、パネリストからは移民がイメージするノスタルジアや故郷のイメージは実体的で一枚岩のものではなく、むしろ移民社会や個人が状況に合わせて作り上げる「ゆらぎ」のあるものであり、宗教の場がこのゆらぎを形成しているケースが多く、ホームランド、ノスタルジアといった鍵概念と宗教との関わりが重要であるとの返答がなされた。また、フロアからはそれぞれ専門とする地域の状況を紹介いただき、各フィールドにおいて本研究の視座が有効であることが示され、今後も共同研究として継続して行くべきであることが確認された。

「国家神道」における公共性と宗教性

——昭和戦前期を中心に——

代表者・司会 藤田大誠
コメンテータ 小島伸之

「国家神道」研究の課題と展望

齊藤 智朗

本発表では、昭和戦前期およびその前後の時期を取り上げた最近の「国家神道」研究から見出せる課題と今後の展望について考察する。

まず、「国家神道」研究全体の問題として、「国家神道」の概念規定をめぐる議論がある。「国家神道」の概念規定は、従来研究者間で一致を見ないが、学術的に生産的な議論を行う上では、やはり共通の意識や基盤が必要となろう。島蘭進『国家神道と日本人』の、「神社神道を国家神道の基体と考える考え方」を否定し、教育勅語や祝祭日システムやメディアが結びつけた「皇室祭祀」や「神社神道」と「国体論」を「国家神道」の構成要素に据えた論により、その概念規定や構成要素をめぐる問題が改めて注目されることになった。ただ、「国家神道」に神社神道以外の事柄を多く含めた概念規定には批判も多く、「国家神道」という用語の「来歴」や、これまでの近代日本宗教史をはじめとする関連分野の研究成果に鑑みれば、「国家神道」の概念をいかに広く捉えようとも、神社神道に関わる事柄を中心に据えての検証が、「国家神道」研究の基盤となろう。